μαθητής
マテーテース

知っておきたいキリスト教のことば （140）

弟子 でし

新約聖書の福音書と使徒言行録には、「弟子」という言葉が多く出てきます。弟子という言葉を一般的な辞書で調べると、「師について個人的なつながりを持って仕えながら、学問や技芸などの教えを受ける人」という意味だと書かれています。

落語家やお相撲さんに弟子入りする際、弟子になろうとする人は様々な師匠や部屋の中から自分に合っていると思われるところを選び、門をたたきます。つまり最初の選択肢は「弟子になりたい人」に与えられます。

しかしイエス様が漁師の四人（ペトロ・アンデレ・ヤコブ・ヨハネ）や徴税人マタイ（レビ）を弟子にした場面を読むと、イエス様がその人たちを偶然ご覧になり、一方的に声を掛けられたということが聖書には書かれています。

しかもイエス様のこれからの活動に有利になりそうな律法学者やファリサイ派、町の有力者といった人を選ぶのではなく、（失礼な言い方ですが）そこら辺にいたそんなに優秀でもなさそうな人に声を掛けられたのです。

実はこれが、キリスト教の「弟子」の特徴なのです。キリスト教が世界中に伝えられるようになった使徒言行録以降、「弟子」という名前はイエス様を信じるすべての人たちを指すようになったのです。

わたしたちの中でもそうです。「イエス様の弟子」というと、牧師のように特別な働きをしている人のことを指すと思うかもしれません。しかし、そうではありません。

イエス様を信じ、受け入れた人はすべて、イエス様から弟子として招かれているのです。わたしたち一人ひとり、イエス様の弟子として歩んでいきましょう。

次回は「天」です。お楽しみに。

「聖マタイの召命」
ミケランジェロ・メリージ・ダ・カラヴァッジオ
（1571～1610 年）

イエスは、「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう」と言われた。

（マルコによる福音書 1 章 17 節）